

現代に生きる中・高校生のための 日本漢詩・日本漢文の教材化 (3)

富永 一登 朝倉 孝之 岡本 恵子 佐藤 利行

1. はじめに

日本漢詩の教材化には、二つの目的がある。一つは、漢詩が中国文化の垂流ではなく、その時代の日本に生活する者として自己の思想・感情を表現した日本独自の文化となっていたことを知ることにある。中国の漢字・漢文を受容し、カタカナ・ひらがなを作り、日本語の表記法を確立して以来、漢語による表現を追求し続けた日本人は、江戸時代の後半になると、日本漢詩の独自性を主張するようになり、日本文化そのものになっていた。そして、漢語を自家薬籠中のものとしていたことが、明治維新以後、西洋文化を自国の文化として吸収していく中で大きな力になっていたことは、今使用されている漢語の多くが日本の近代化とともに作られていることを見れば、明らかであろう。

しかし、国語の教材の中で、日本漢詩を取り上げるのは、決してナショナリズムの昂揚をはかるためではなく、現代の科学技術優先、効率化と利益至上主義の風潮の中で疎かにされている国語の力の必要性を再認識することにあるのは言うまでもない。もう一つの日本漢詩の教材化の目的は、ここにある。ただ、一口に国語の力をといても、これを身につけるのは容易なことではないし、即効性のある効果的な方法はない。やはり、古来言われている、読む・書く・考える、この三つの基本の繰り返ししかないのである。

中国を代表する文人の宋・蘇軾は、師と仰ぐ歐陽脩が語った文章上達法を、『東坡志林』巻一に、次のように記している。

「無它術。唯勤讀書而多為之、自工。世人患作文字少、又嬾讀書。每一篇出、即求過人、如此少有至者。疵病不必待人指擿、多作自能見之。」此公以其嘗試者告人。故尤有味。(「它術無し。唯だ讀書に勤めて多く之を為れば、^{おの}自づから^{たくみ}工ならん。世人の思ひは文字を作ること少く、又讀書を嬾るにあり。一篇を出だす毎に、即ち人に過ぎんことを求む。此くの如くんば至る者有ること少し。疵

病は必ずしも人の指擿を待たず、多く作れば自づから能く之を見ん」と。此れ公其の嘗て試みし者を以て人に告げしならん。故に尤も味有り。)

歐陽脩は、文章上達法に特別な術はなく、ただ讀書に勤め、多く書けば自然に上手になると言い、蘇軾はそれが先生の実体験に基づく言葉であり、だからこそ先生の記事には味があると言う。まさしく、より多く読み・書き・考えるという基本の大切さを述べたものである。

国語教材として、その実践例を身近に学ぶことのできる教材が日本漢詩にはある。特に江戸後期の漢詩人たちは、学習者と同年齢の少年期から膨大な量の漢籍を読み、多くの詩文を日々書き、思索を重ねている。以下、学習者がより国語の力の必要性を感じ、国語への学習意欲を高めそうな作品をいくつか紹介してみよう。

頼山陽(1780-1832)の14歳(以下の年齢は数え年である)の五言古詩、

癸丑歳偶作 みづのとうしのとし たま 癸丑歳に偶たま作る

十有三春秋	十有三春秋
逝者已如水	逝く者は已に水の如し
天地無始終	天地に始終無く
人生有生死	人生に生死有り
安得類古人	安んぞ得ん 古人に類して
千載列青史	千載 青史に列することを

生まれてから13年の歳月が過ぎ、時の流れは水のように止まることがないことを、『論語』子罕篇の孔子の言葉「逝く者は斯くの如きか。昼夜を舎かず。」をふまえて詠う。そして、天地には始めも終わりもないが、人間には生と死がある、とすれば、わたしも古の人と同様に名を残して、千年の後までも歴史書に記載されるようになりたいという。「少年よ大志を抱け」を、そのまま素直に詠んだ詩である。漢詩の中に敢えて「和習」を持ち込み、新しい日本語の表現に挑戦し、新たな日本文化を創造したのが頼山陽の漢詩漢文の特

儼だと言われる。それを実践していく気概が、14歳のこの詩に見られるであろう。新たな国語表現に対する意気込みである。

同じ気概は、広瀬旭荘（1807-1863）の17歳の詩「読昭陽先生『傷逝録』、賦長句奉呈」（昭陽先生の『傷逝録』を読み、長句を賦して奉呈す）にも見える。旭荘は、師の亀井昭陽が三男の夭逝を悲しんだ文章を読んで、24句の七言歌行体の詩を作り、その末尾に、

日東文運従今興 日東の文運 今より興らん
君不見昨夜奎壁芒如月 君見ずや昨夜奎壁^{ひかり}芒月の如き

と詠う。日東は日本の別称、奎は文運を司るという星座の名、壁は美しい玉で星座の美称、芒は星の光で、我が国の学問の隆盛は今から興るのです、先生はご覧にならなかったのですか、昨夜、文運を司る星が月光のような輝きを放っていたのを、という師に対する遠慮のない言葉には、少年ならではの鋭い気迫が感じられる。日本漢詩は、このような意気込みによって隆盛を築いていった。そして、それによって生み出された新しい国語の表現力が近代日本の文化を形成する礎になったのである。

同じく旭荘が18歳の時に耶馬溪の一つ「虎伏巖」を読んだ詩を見てみよう。

我立橋欲壞	我立てば橋壊れんと欲し
我行棧欲絶	我行けば棧絶えんと欲す
蒼鷹攫雉兔	蒼鷹 雉兔を攫み
黒巖孕銅鉄	黒巖 銅鉄を孕む
壁峭天窄小	壁峭しく天窄小
泉咬石坼裂	泉咬み石坼裂す
松柏無新皮	松柏 新皮無く
澗溪有古雪	澗溪 古雪有り
風霾打帽生	風霾 帽を打ちて生じ
豺狼見客悦	豺狼 客を見て悦ぶ
螻屈過嶮嶮	螻屈して嶮嶮を過ぎ
魚貫穿曲折	魚貫して曲折を穿つ
窅冥蘿陰深	窅冥として蘿陰深く
咫尺人影滅	咫尺 人影滅す
凄然浄衣襟	凄然たり浄き衣襟
一洗人間熱	一洗す人間の熱

鷹が雉や兔をつかみ取り、黒々とした巖は銅や鉄を含んでいる。崖が壁立して天は狭く見え、泉の流れが嘯みついているかのように石が裂けている。松柏に新しい樹皮はなく、谷川には古い残雪がある。風塵が帽子を叩く時のように生じ、山犬や狼は旅人を見て喜んでいる。わたしたちは尺取り虫のように険しい道を登り、魚のようにうねうねした道を進んで行く。薄暗くつたの絡まる木陰では、すぐ近くの人姿さえ消えて

しまう。ぞくっとするほど襟元が寒くなり、俗世間の暑さはすっかり洗い流されてしまった。

『文選』と杜甫の詩の言葉、擬人法を駆使し、自己と自然が向き合うことによって、巖が生き物のように躍動しているような感じを受けるであろう。耶馬溪は、頼山陽が「耶馬溪山 天下に無し」と詠んで七言絶句九首を作って以来、天下にその名を広めることになった。山陽と並んで19世紀初めの二大詩人と称される梁川巖（1789-1858）も「耶馬溪絶句」九首を作っている。旭荘は、自分がこの景に向かえば、このようになるのだという、先人とは違う独自性を示したかったのであろう、形式にとらわれずに思いを表現できる五言古詩で詠んでいる。使われている漢語が難しく、教材化するには工夫が必要であろうが、うまく活用すれば、より多く読み、思いを想像力を駆使して書き連ね、独自の表現を求めようとする意気込みを感じとらせることができる作品ではなからうか。

また、旭荘の長兄の広瀬淡窓（1782-1856）の15歳の作には、学業の修行に行く途中に少年がふと見せる思いが巧みに表現されている。

筑前道上	筑前の道上
野店葡萄架	野店 葡萄 ^{ぶどう} の架 ^{たな}
駅亭枳殻墻	駅亭 枳殻 ^{からたち} の墻 ^{かき}
有人来弛担	人有り来たりて担 ^に を弛 ^と げば
言語似吾郷	言語 吾が郷に似たり

淡窓は、寛政八年（1796）八月に、郷里の日田（大分県）から、亀井南溟（1743-1814）・昭陽（1773-1836）父子に入門して勉学するために、筑前（福岡）に向かった。筑前の茶店には葡萄の実がなった棚があり、宿場の家々は枳殻の生け垣がめぐらしてある。いずれも郷里では見ることのなかったものであり、他郷を強く感じていたところ、ある人が休息のためその茶店にやって来て肩から荷物を下ろした。彼が話す言葉を聞くと、自分の郷里の日田方言に似ていた。同郷の人が同じ他郷の地に来ているという一体感が生じ、心強くなった少年の嬉しさが「言語 吾が郷に似たり」という結句に、よく表現されている。状況は違うが、方言から感じる懐かしさは、石川啄木の短歌、

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく

と共通するところがある。少年期の思いが学習者と共有できる作品として教材化が可能であろう。

更に、江戸漢詩の教材化では、女性詩人が繊細な感覚で日常の折々の思いを詠んだ作品を取り上げることも可能である。頼山陽（1780-1832）の弟子の女性漢詩人の江馬細香（1787-1861）の詩を紹介しておこう。

所見	見る所
半輪淡月夜三更	半輪の淡月 夜 三更
誰住梅辺小院清	誰か住む 梅辺 小院の清きに
知得読書人未寐	知り得たり書を読み未だ寐 ねざるを
銀灯一点透簾明	銀灯一点 簾を透して明らか なり

(原詩では、結句の「透」が「隔」だったが、頼山陽が批正)

半月が出ている夜中、梅の木のある家に明かりがともっていて、簾を通して読書に励む姿を見かけた時のことを詠ったものである。一つの夜の情景が、一首の中に表現されている。日常のさりげない一コマではあるが、周辺の状況に気づく繊細な感性がなければ、詩として残されることはない。承句で誰が住むのだろうかとは言うてはいるが、もしかして日頃から気になっている人の家かもしれないと想像することもできる。そうだとすれば、「銀灯一点」のもとにいる人に集中する作者の思いも感じられてくる。一つの難しい漢字もなく、高校生にも親しみやすいものであるし、作者がどんな思いで、この何気ない情景を詩に書きとめたのか、想像し合うのもおもしろい。

言葉は情感を伴ってこそ身に付く。漢字・漢語を自国の文化とし、漢詩の創作を通して自らの思いを表現した日本の漢詩人の文学的営為を学ぶことによって、それを実感できるのではなからうか。

日本漢詩は、学習者が国語の力の必要性を認識するのに、より身近な教材を提供できる可能性を秘めている。今後、引き続きより多くの作品を読解し、教材化するにふさわしい作品を選択していかなければならぬ。
(富永一登)

2. 日本漢詩を作る(子規の場合)

子規はその生涯において、およそ二千首の漢詩を残している。その中で子規が最初に作った詩が、次に挙げる「聞子規」(子規を聞く)という五言絶句である。

聞子規

一声孤月下	一声 孤月の下
啼血不堪聞	啼血 聞くに堪へず
夜半空欹枕	夜半 空しく枕を <small>そばだ</small> 欹つ
古郷万里雲	古郷 万里の雲

自注に「余作詩以此為始」(余の作詩は此れを以て始めと為す)とあるように、子規が初めて作ったのがこの詩ということになる。

子規は慶応3年(1867)に松山で生まれた。武士の家に生まれた子規は、八・九歳の頃から外祖父で漢学者であった大原観山のもとで漢詩の素読を始め

た。その頃のことについては、『筆まかせ』(明治21年)に、次のようにある。

余は幼時より何故か詩歌を好むの傾向を現はしたり。余が八・九歳の頃外祖父観山翁のもとへ素読に行きたり。其頃の事なりけん。ある朝玄関をはいりしに其のほりに二・三人の塾生が机をならべぬしうちに、一人が一の帳面を持ち、其中には墨で字を書き其間に朱にて字を書きたるを見たり。

それは何にやと問へば詩なりといふ。余は固より朱字の何物たるを知るよしもなく詩はどんなものとも知らず。ただ其朱墨相交るを見て綺麗と思ひしなるべし。早く年取りて詩を作る様になりたしと思へり。

其後観山翁は間もなく物故せられしが、ひきつづきて土屋休明先生の処へ素読に行きしかば、終に此先生につきて詩を作るの法、即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のなればかたを習ひしは明治十一年の夏にて、それより五言絶句を毎日一つづつ作りて見てもらひたり。

先に挙げた「聞子規」の詩はまさにこの頃、すなわち明治11年に作られた五言絶句なのである。慶応3年に生まれた子規であるから、明治11年といえは、満12歳。ここで驚かされるのは、今の小学6年生の年齢にして、こうした漢詩を作ることができたということである。「聞・雲」が韻を押しは言うまでもなく、難しいとされる平仄の規則もきちんと守られている。

○○○●●
○●●○○
●●○○●
●○●●○

○が平字、●が仄字であるが、この平仄の配列は、五言絶句の平仄のきまり通りである。わずかに12歳の少年が、どうしてこれほどまでに見事な漢詩を作ることができたのか。

その答えは、先に引用した『筆まかせ』の中にある。「即ち幼学便覧を携へ行きて平仄のなればかたを習ひ」とあるように、当時、漢詩を作る際には『幼学便覧』を参考にしていたのである。『幼学便覧』の中に「客舎聞子規」の項目があり、そこには子規が作詩に用いた詩語「一声・孤月下・啼血・不堪聞・半夜・欹枕・古郷・万里雲」がすべて網羅されている。『幼学便覧』とはそのような作詩のための参考書であり、そこに集めてある詩語を並べると、自然に漢詩ができる仕組みになっているのである。

今日、我々が漢詩を作る場合にも、先ずはこうした方法を用いる。書店に並べられた『漢詩を作ろう』

『作詩入門』といった類の本は、おおむね『幼学便覧』と同じで、ある詩題にそって、そこに集めてある詩語をうまく配列すれば漢詩ができる仕組みになっているのである。この種明かしをして、中学生・高校生に詩語を与えて漢詩を作らせれば、みな見事な詩を作ってみせてくれるであろう。

漢詩は、明治期には、和歌や俳句・川柳などとともに、日本人の基礎的教養の一つであった。漢詩が俄に廃れたのは、新聞での投稿欄が無くなってからであると言われている。こうした現状を憂えて全国漢文教育学会の会長でもある石川忠久先生は、数年前に全国漢詩連盟を設立された。設立当初3千名であった会員は、今では6千人を越すという。二松学舎大学では昨年、第1回「漢詩甲子園」が開催され、全国の高校生からも漢詩の秀作が寄せられた。現代の高校生に、漢詩に興味を持ってもらい、自分でも漢詩を作ることができるのだということを分かってもらいたい。子規の初めての五言絶句は、その契機になるのではなからうか。

(佐藤利行)

3. 日本漢詩の学習

改めて日本漢詩を読み直したとき、教科書教材ではないがこのまま埋もれさせておくのは惜しいと思う作品は少なくない。そこで、ここでは紙面の都合上、二首について学習指導案を掲載し、学習の提案とした。

この二首は、ともに紛れもなく日本人が日本人の感性、心情によって生み出した作品である。生徒にも近い夏目漱石の俳画にも似た小品と、忘れることのできない原爆投下を詠じた作品である。

1) 夏目漱石「無題」詩(明治四十五年七月)の場合 無題

緑雲高幾尺	緑雲 高さ幾尺
葉葉疊清陰	葉葉 清陰を ^{かさ} 重ね
雨過更成趣	雨過ぎて 更に趣を成し
蝸牛陟翠岑	蝸牛 翠岑を ^{のぼ} る

〔現代語訳〕

青々と茂った葉の桐の高さはいかほどだろう
重なる葉と葉は清らかな木陰をつくる
雨の後はさらに趣を深め
かたつむりがみどりの岑をわたる

〔語釈〕

- 五言絶句 下平十二侵韻(陰・岑)
- 緑雲 青葉の茂みを雲にたとえた表現。白居易の詩「雲居寺の孤桐」に「一株青玉立ち 千葉緑雲委ぬ」

とある。

○清陰 清らかな木陰。

○蝸牛 かたつむり

○陟 ふむ。「渉」と同じ。

○翠岑 みどりのみね。桐の葉あるいは茎を、翠の岑にみたてたもの。大正五年九月八日作の「画賛」と題する俳句に「蝸牛や五月をわたるふきの茎」とある。

〔教材化にあたって〕

生徒が漢詩のテーマとして思い浮かべるのは、戦争・友情・旅であろう。杜甫「春望」・李白「静夜思」・王維「送元二使安西」などが漢詩に対する生徒のイメージを形作っている。漢詩はその他に政治や自然・酒を主題として作られているが、恋愛の詩は甚だ少ない。「万葉集」や「古今和歌集」「新古今和歌集」に多く恋愛がうたわれているのに対して、漢詩は固いと生徒が思うのも無理はない。本居宣長を引くまでもなく、異性を思う情は繊細で人間の存在の根源そのものを問い、不思議な人の心の様相をうつしだす。

教科書で恋愛をテーマにした小説に漱石の「こころ」がある。教科書では、「先生の遺書」が掲載されている。お嬢さんをめぐる私とKの恋愛関係が私の視点から描かれている。Kは自死するが、その理由は誰にもわからない。教科書では、Kの自死の場面で終わることが多い。生徒の漱石に対するイメージは「こころ」が与えるところが大きい。即ち「自我」「我執」「エゴイズム」。漱石は近代人が対決した逃れられない「自意識」を執拗に追求する作家として、生徒には強烈に焼き付いている。要するに深く、固い。その漱石のイメージを、固いと生徒が思っている漢詩によって変えてみたい。同時にそれは漢詩のイメージを豊かなものにするにもつながる。

漱石は生涯に二百首余の漢詩を残している。漱石の思想の根源には漢文の素養がある。その思想を表現する言語は日本語である。近代日本において、文学的な散文は文語体から口語体に移ったが、漱石は口語体で文学的な文体を作ることに苦心を重ねた。一方漱石にとって漢詩を作ることは散文の口語表現とは異なる自由さを獲得する営みでもあった。内心の解放のためには漢詩の方が適していたのである。ここでは、「無題」詩(明治四十五年七月)を取り上げる。小さな生き物に目をとめる柔らかな感性を、日本漢詩がどのように表現しているのかを生徒たちに味わってほしい。

対 象 高校二年生

学習目標

1. 漢詩に表現された情景を読み取ることができる。
2. 漢詩が小さな生命に対する柔らかな感性を表現できることを知る。

学習指導案

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1, 本時の学習目標を知る。 2, 詩を読む。	<ul style="list-style-type: none"> ・漱石が漢詩を作っていたことを知らせる。 ・五言絶句であることを確認する。 ・韻字を確認する。 ・2-3のリズムであることをとらえる。 ・音読する。
3, 情景をとらえる。 ①一, 二句の情景を説明する。 ア, 「緑雲」は何をたとえているか考 える。 イ, 季節を想像する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「緑雲」をイメージさせる。白居易の詩「雲居寺の孤桐」に「一株青玉立ち 千葉緑雲委ぬ」とあることを知らせ、この高い樹木は桐であり、青葉の茂みを雲にたとえていることをつかませる。 ・青々とした葉葉は重なり合い、清々しいかげをつくる。このような、情景はいつごろの季節かを問う。
②三, 四句の情景を感じ取る。 ア, 四句で視線がどこに移動している かとらえる。 イ, 「翠岑」とは何か説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ・さわやかな大きな情景から小さなかたつむりへ視線は移動し、漱石の関心が焦点化されていることに気づかせる。 ・「翠岑」が桐の鮮やかなみどりの枝葉をたとえていることに気づかせる。
4, 最も印象に残った句を話し合う。 5, 漢詩を絵にする。	<ul style="list-style-type: none"> ・なぜ印象に残ったのかもあわせて、自由に話し合わせる。 ・時間の余裕はあまりないが、絵になる詩である。漢詩を楽しく学習するためにも画かせてみる。どのように描くかでこの漢詩のどこに着目したのかがわかる。
6, まとめ 漱石が漢詩で表現しようとしたものを 知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・「蝸牛や五月をわたるふきの茎」の句を紹介する。漢詩は小さな生き物への思いも描くことができる。

「蝸牛陟翠岑」は非常に印象的な句である。漢詩は重々しいという印象を持つ生徒が多いと思われるが、このようにみずみずしく柔らかな感性が漢詩で表現できることを知ることも、高校生にとっては必要である。漱石の小さな生命に対する優しさやヒューモアも感じ取ってほしい。(朝倉孝之)

2) 土屋久泰(竹雨)「原爆行」詩の場合

原爆行

怪光一綫下蒼旻	怪光一綫 蒼旻より下る
忽然地震天日昏	忽然 地震ひて 天日昏し
一刹那間陵谷変	一刹那の間 陵谷 変じ
城市台榭帰灰燼	城市 台榭 灰燼に帰す
此日死者三十万	此の日 死者 三十万
生者被創悲且呻	生者は創を被り悲しみ且つ呻く
死生茫茫不可識	死生茫茫 識るべからず

妻求其夫兒覓親	妻は其の夫を求め 兒は親を覓む
阿鼻叫喚動天地	阿鼻叫喚 天地を動かす
陌頭血流屍横陳	陌頭 血流れて 屍横陳す
殉難殞命非戰士	難に殉じ命を殞すは戰士に非ず
被害総は無辜民	害を被るは総て是れ無辜の民
広陵慘禍未曾有	広陵の慘禍 未だ曾て有らず
胡軍更襲崎陽津	胡軍更に襲ふ 崎陽の津
二都荒涼鷄犬尽	二都荒涼 鷄犬尽き
壞牆墜瓦不見人	壞牆 墜瓦 人を見ず
如是殘虐天所怒	是くのごとき殘虐は天の怒る所
驕暴更過狼虎秦	驕暴更に過ぐ 狼虎の秦
君不聞	君聞かずや
啾啾鬼哭夜達旦	啾啾 鬼哭し 夜旦に達し
殘郭雨暗飛青燐	殘郭雨暗くして青燐飛ぶを

〔現代語訳〕

怪しい光が一すじ八月の青空から下りたかと思うと
 たちまち大地はゆれ太陽も真っ暗になった
 一瞬にして岡も谷も姿を変え
 市街地もビルも灰燼に帰してしまった
 この日の死者は三十万人を数え
 生き残った人は傷を負って悲しみ呻く
 生死は分からず知るすべもない
 妻は夫を 子どもは親を捜し求める
 阿鼻叫喚の惨状は天地も揺るがすほど
 道ばたには血が流れ 死体がごろごろ並んでいる
 この災難で命を落としたのは軍人ではなく
 すべて罪もない人々であった
 広島は未曾有の惨事であったが
 異国の軍隊は続いて長崎の港をも襲ったのだ
 二つの都市は焼け野原となり鶏や犬まで死に絶えて
 壊れた塀や墜ちた瓦ばかりで人影もない
 これほどの残虐行為は天もゆるすはずがない
 驕暴さはあの虎狼のような秦にも勝る
 君聞いたことはないか（あるだろう）。
 夜ごと亡霊が悲しげに朝まですすり泣いており
 雨で暗い日には廢墟に鬼火が飛ぶというのを

〔教材化にあたって〕

作者は土屋久泰、号は竹雨（1887～1958）。1928年芸文社を創設、漢詩文雑誌「東華」を主宰した。1931年より大東文化学院で指導にあたり、のち学院次長になった。しかし、第二次世界大戦での苦難、1945年の大空襲で学舎・芸文社ともに烏有に帰した。学校の復興のために奔走し、1949年大東文化大学学長となるも、過労から病床に伏しがちとなり、1954年には理事長を辞し、以後は詩業を軸に活躍した。

この詩の制作時期、事情は寡聞にして不明であるが、広島平和記念資料館に、1994年の改築まで、石橋犀水の筆による作品が展示されていた。現在は資料室の空調が整ったガラスケースに収められているが、資料館のHP注の「平和データベース」（美術品）に映像が掲載されており、いつでも見るができる。1955年

本時の学習指導案〈2時間展開〉

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点
<p>〈第1時〉</p> <p>1. 本時の学習目標を知る。</p> <p>2. 詩の構成を知る。</p> <p>① 原文を見、気づきを発表する。</p> <p>② 範読を聞き、読み方を確認する。</p> <p>③ 各自で繰り返し音読し、大体がリズムよく読めるようになる。</p>	<p>・原爆を詠じた日本漢詩があることを知らせる。</p> <p>・字数、押韻を参考に詩形を考えさせた後、「君不聞」に注目させ「歌行体」について簡単に説明する。</p> <p>・読み慣れるにつれて、対句、さらに句のまとまりにも注意をしながら読むように指示する。</p>

3月受け入れとあり、少なくとも被爆10年を待たずに作られたものであることは間違いない。

被爆の実状を目にしての作か否かは知らず、少なくとも自身の戦災体験と重なる実感を詠じたものだろう。竹雨について、1969年の『ある中国人の回想』に「漢詩は数年前に亡くなった土屋竹雨をもって終わってしまった。…詩ができる、みずから筆をとってすらすらと書いていったが、他の人にはそういうことはできないことであつたろう」^注とあるのを見れば、逆に、漢詩は遠い時代だけでなく少なくとも昭和の初め頃までは日本人の精神生活の深い部分を支えてきたことがわかる。日本漢詩が中国の漢詩の主流に止まるのであれば、この「原爆行」のような詩は生まれ得なかったに違いない。そのことは生徒たちにも実感できるはずである。

歌行体で、長さも用字も高校生に親しみやすいとは言えない詩だが、音読すればイメージは鮮やかである。徒に訓詁注釈に時間をかけるよりも、音読の工夫が読解を深めるような教材かも知れない。その際、米国批判に止まらないためにも他の教材、たとえば、被爆直後の栗原貞子「生まれめん哉」（『詩歌集黒い卵』1946年）、朝鮮戦争で原爆使用を考えたトルーマン声明を契機に生まれた峠三吉「にんげんをかえせ」（1951年『原爆詩集』序）、水原秋桜子の俳句「麦秋の中なるが悲し聖廢墟」等々他の作品と組み合わせることが効果的であろう。朗読、群読と、読むという表現行為による様々な学習が可能である。

ただし、ここでは、この「原爆行」を単独で取り上げた場合の学習指導案を示すことにする。現代の高校生の学習にどのように日本漢詩を生かすことができるかという立場からの一つの提案である。

対 象 高校2年生

学習目標

1. 漢詩を心情を考えながら音読することができる。
2. 漢詩が、日本人の心情表現として重要な位置を占めていたことを知る。

<p>3, 詩の大体の意味を理解する。</p> <p>① まず広島 of 惨状が描かれ, ついで長崎にも言及していることに気づく。</p> <p>② 初めの 12 句から広島 of 惨状を読み取る。 ○時間の流れに合わせて叙述を整理し, 描写と作者の思いを分ける。</p> <p>③ 13 ~ 16 句目の内容を読む。 ○ 16 句目が, 広島長崎両市の情景であることに気づく。</p> <p>④ 17・18 句は誰のどのような思いか考える。</p> <p>⑤ 終わり 19・20 句を全体のまとめとして読む。</p> <p>4, これが日本漢詩であることを確認して本時のまとめを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「二都」とはどこか発表させ, 直前の二句にある「広陵」「崎陽津」に結びつける。 ・ 4 句を一まとまりとして意味を考えさせる。 ・「一刹那」「阿鼻叫喚」「無辜民」等について漢和辞典と国語辞典の両方で調べさせ, 当時日本語として用いられていたことに気づかせる。 ・長崎についても前 12 句の記述が当てはまることを押さえさせる。 ・「未曾有」「更」のつながりを参考に考えさせる。 ・「如是」の指示内容を確認させる。 ・「驕・暴」をそれぞれ熟語にして, 意味を考えさせ, 何に対してそう述べているのか考えさせる。 ・「君不聞」の部分を音読させ, 効果を考えさせる。 ・「原爆」は中国語ではなく日本語であることを知らせ, 詩が日本人による日本語の詩であることを確認させる。 ・次時までに読みの工夫を意識しておくよう指示する。
<p>〈第 2 時〉</p> <p>1, 前時の復習を行い, 本時の学習目標を知る。</p> <p>2, 詩の主題を生かして読むにはどのような工夫が必要か, 考える。</p> <p>3, 15・16 句に注目し, 内容を再考する。 ○『老子』の「小国寡民」を振り返り対照させる。</p> <p>○現代に生きる者として, この詩の思いをどのように受け止めるか考える。</p> <p>4, 詩を心情を込めて音読する。</p> <p>①どのように音読するか, 相談し, 考える。</p> <p>②各自練習し, グループで助言しあう。</p> <p>③数名音読し, 意見交換を行う。</p> <p>5, 本時のまとめを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一斉音読を行い前時の学習内容を想起させる。また「原爆行」に込められた心情を伝えるにはどのように読むのが効果的か考えることを伝える。 ・各グループで検討させ, 強弱, 緩急, 力を入れて読む箇所等を, 理由とともに発表させる。(この段階では原爆投下への批判を声高に読む傾向が強いと思われる) ・「小国寡民」では, 「鶏犬の声」が聞こえる距離でどのような暮らしが展開するか。文明の産物である「怪光」や戦争について対照させる。 ・同テーマの作品で知っているものを発表させる。(原爆に限定しない) ・自分たちはこの詩をどのように音読するか。 ・意見交換後, 個人でワークシートに整理する。 ・日本漢詩が生活の中にあつたことを知らせる。 ・資料館にあるこの詩の写真を紹介し, 詩の作者, 書の作者, 寄贈した人物の思い等を想像させる。 ・他にも多くの原爆文学があることを紹介する。

(岡本恵子)

4. おわりに

一昨年この研究を始めた頃には, PISAの報告書による「読解力の低下」ショックが盛んに取り沙汰されていた。それでも数学的リテラシーおよび科学的リテラシーは従来同様 1 位グループにあつたため, 学力低下の矛先はもっぱら「読解力」に向いていた。ところが, 従前より問題視されていた理科離れがいつそう深刻の度を増し, ついには今年度, 学力全体の地盤沈下を憂慮して指導要領の改訂に向けた中央教育審議会の「審議のまとめ」が提出された。その中で, 小学校に

おいては易しい古文や漢文の音読や暗唱, 中学校では常用漢字の大体が読める力の育成がうたわれているのが目につく。

本研究では当初より, 漢字漢文はこの国の言語生活に不可欠なものであり, 国語学習においてゆるがせにできるものではないという認識の下, この国の先人たちの築いた文化のうち日本漢詩・漢文に注目したのであつた。

先人たちが学び表現したのも他ならぬ漢字・漢語を用いてであつたし, たとえば江戸時代の庶民文化のそ

ここにも漢字漢文の影を見ることができる。すなわち、日本漢詩・漢文は外来文化の受容であると同時に日本的感性・思想の創造の礎でもあったのだ。近代以降西洋化の波の中で忘れ去られようとしているが、日本文化の根幹にあり、日常の言語生活を支えているのも紛れもなく漢字・漢語である。であればこそ、その漢字・漢語を用いて日本人が何を思索し、表現したのかを知ることは大きな意義があるのである。

また、同じ外来文化であっても、表音文字であるアルファベットをカタカナに改めただけの外来語、さらには国際社会に通用するはずのない和製英語の氾濫は、それ自体の功罪を云々しないにしても、表意文字である漢字の持つ豊かさを見えなくしてしまっているのではないか。漢字は、たとえば初対面の熟語でもおよその意味が類推できたり、声符から音の見当がつけられる。あるいは豊かな造語力やデザイン性など、現代にあっていっそうその価値をもつといえよう。このような漢字の豊かさを学ぶ上でも、日本漢詩・漢文の学習は有効であると考えられる。

1) 3カ年を振り返る

初年度は、戦後、日本漢詩・漢文の学習がどのような変遷をたどったのかを教科書および指導書を中心に辿り、考察を加えた。

その中で明らかになったのは、指導要領の変遷ともなって大きく変化したということである。急激に減少したのは言うまでもないが、とりわけ国語Ⅰ・Ⅱの時代にはほとんど触れることすらない状態であった。

これらの変遷を見る中で、日本漢詩の教材としての位置づけは次のようなものがあつた。

- ① 日本人の伝統的な価値観、感受性に触れる。
- ② 中国文化の日本文化に及ぼした影響を知る。
- ③ 伝統的生活を背景とした文化を継承する。
- ④ 日本の風土に根ざした日本漢詩の特性を知る。
- ⑤ 歴史的人物の生き方、考え方に触れる。
- ⑥ 古文・漢文との関わりから、日本古典文学の理解を深める。
- ⑦ 日本の風土や考え方に即して生み出されてきた和製漢語や、漢語の理解を深める。
- ⑧ 朗唱を通じてリズムや響きを感じ取る。

現行指導要領になって「古典」で「教材には、日本漢詩・漢文も含めるようにすること。また必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること」とあつて、数首の日本漢詩が復活した。

作品は非常に限られ、菅原道真「不出門」広瀬淡窓「桂林莊雜詠」頼山陽「泊天草洋」が多くの教科書に見える。加えて新しく正岡子規「送夏目漱石之伊予」

の採用が増えたのは少しでも生徒たちに近い作品を、ということであろうか。

これらをふまえ、過去の教材の中に改めて教材として生かせるものはないか、また新しく教材化できるものはないか模索することにした。

続いて昨年度は、教材化にあたって2つの柱を考えたい。ひとつは、中国文学の受容として位置づける場合であり、もうひとつは日本漢詩が日本漢詩として輝きを放つ江戸以降の作品を中心に扱う、ということである。

前者は、前出の菅原道真「不出門」がそれに当たるが、こうした詩の多くがいかにか中国人の基準に合うかによって詩の質を評価し、和臭を嫌ったのを考えれば、生徒にとっての魅力という点で限界があるのは当然である。中国文学の受容について知るには、むしろたとえば白居易の詩が、『枕草子』で「香炉峰下新ト山居草堂初成偶題東壁」詩を中心にウィットに富んだ定子とのやりとりを追憶する場面で生かされたり、『源氏物語』で「長恨歌」が桐壺帝と更衣の悲恋に引用されたりしたものの方が生徒には理解しやすいと考えた。

そこで本研究では、後者の、心情の表出方法の一つとして作られた日本独自のいかにも日本らしい江戸時代以降の日本漢詩の教材化を試みることにした。

江戸時代は日本漢詩の全盛期である。特に、荻生徂徠などによって日本の漢学が独自の発展を遂げた元禄以降、俳句と肩を並べるほどであった。江戸後期になると武士のみならず町人にも裾野が広がり、菅茶山のような農家に生まれ地方に暮らす詩人も現れたほどである。もちろん背景に漢文の素養があつたことは言うまでもない。

明治に至っても、漢詩を詠ずるなどの行為が生活の場面に残っていたのは確かである。このように定着したのは、日本に生活する者として自己の思想、感情の表現手段としての日本漢詩を日本の文化と捉えていたことがあつたろう。このような、外来の漢字・漢語を学び、漢詩の創作を通して自国の文化として咀嚼し吸収してきた先人の営為を知ることは、現代の中・高校生であればこそ必要な学習なのではなかろうか。

そこで、現行教科書教材である菅茶山「冬夜読書」と正岡子規「送夏目漱石之伊予」の授業実践を通して考えることとした。授業者による個性に左右されないよう、二人が二つの詩ともに実践し、その反省と課題から共通する課題等について考察することにした。

その結果期せずして一致したのは次の点であつた。

- ① 授業のねらいを、かつての日本人が自己の、あるいは互いの精神生活に不可欠な一つの表現形式として選択した日本漢詩で心情を吐露し、交友を深めよ

うとしたことに置いたのは適切で、生徒の興味を引き出すのに有効であったということ。

- ② これまでも訓詁注釈を突き抜けた漢詩の学習を目指してきたが、それと同じ方向での学習が日本漢詩でも可能であるということ。つまり、作者の心情にたどり着く学習を通じて生徒自身の内面を揺さぶる力が日本漢詩にもあるということである。
- ③ 日本漢詩を他の表現形式の作品と関連づけて扱うことは有効性であるということ。俳句と漢詩あるいは和歌、というように同時に複数の表現形式で作品が作られていることは珍しいことではない。それらをあわせて読むことは、作品の理解を助けるのみならず、日本文化の豊かさをいっそう感得させることにつながるのである。

一方で、留意すべき点も明らかになった。

- ① 日本漢詩とは言え、生徒の持つ漢字・漢語の語彙はかつてのそれと同じではない。またその知識も非常に浅い。したがって鍵になる漢字・漢語について指導上の配慮が必要になる。
 - ② 日本漢詩は日本語で訓読されるときのリズム・響きが大切である。したがって新しい教材を発掘するにあたっては特に吟味された訓読にすることが大切である。
 - ③ 生徒との距離ができるだけ遠くない作品を選び、さらにその距離を縮める工夫が必要である。無論それは俳句や和歌についても同様であるが、典故や知識に深入りすれば興味を削ぐことになりかねない。生徒がその日本漢詩を通じて考えることのできる作品を選択することが何より求められると言える。
- 以上をふまえて今年度は、どのような日本漢詩が教材となりうるのか、またどのようなアプローチで生徒と日本漢詩とを結びつけるか、という観点で研究を進めた。

冒頭でも述べたように、国語の教材の中で日本漢詩を取り上げるのは、日本漢詩が日本に生活する者として自己の思想・感情を表現した独自の日本文化であったことを知るとともに、科学技術優先、効率化と利益至上主義という現代の風潮の中で疎かにされている国語の力の必要性を再認識することにある。安直な学習が深い思索に結びつくはずもなく、しきりに標榜される論理性や独創性の涵養も画餅でしかない。時間がかかってもじっくりと取り組ませる学習が必要であり、その基礎作りには、言葉をしっかりと見つめる学習が効果的だと考えている。そして、その一つとして日本漢詩が考えられるべきである。

富永は江戸後期の漢詩人の作品から生徒がより学習意欲を高めそうな作品として、14歳の頼山陽、17歳、

18歳の広瀬旭莊、その兄広瀬淡窓15歳という生徒と近い年齢での作品を紹介した。内容的にはやはり生徒の感覚に近く興味を持ちそうな作品である。また、難しく堅苦しいという印象が強い漢詩ではあるが、女性の繊細な感覚で日常の思いを詠じた江馬細香の詩をあわせて紹介し、教材の広がりを示した。

次いで佐藤は、正岡子規がわずか12歳で作った最初の詩がどのようにして作られたか紹介し、生徒自身に漢詩を作らせることを提案している。実際に近年まで学校現場でも漢詩を作らせていたと聞く。また、趣味で漢詩を作るサークルも少なくない。もはや授業者に作詩を指導する力は望むべくもないが、外部講師やそうでなくとも一緒に楽しんで作るという試みがあってもよいのではないかと。

今回提案した授業は、朝倉が夏目漱石「無題」、蝸牛に向けた漱石のみずみずしく柔らかな感性を読み取らせようとしたものである。人工物に囲まれた現代にあっても蝸牛は身近な生き物である。瑞々しい感覚で切り取った漱石のこの詩は、子どもたちがうなづくことのできる世界であり、決して難しい作品ではない。こうした作品は日本漢詩をより身近なものに感じさせるのではなからうか。

岡本の挙げた「原爆行」は、そのままでは生徒にとってハードルが高いに違いない。しかし、生徒にストレートに届く内容である。漢詩で詠われることの新鮮さ、漢詩のリズムだからこそその世界に触れさせることのできるのではないだろうか。

日本漢詩・漢文の教材としての歴史を学び、現在の中・高校生の学習に資するという点から検証するとき、どうしても漢詩が中心になってしまった。最大の理由は分量である。そうでなくとも漢字が並ぶことへの抵抗は大きい。漢文のおもしろさ、深さを惜しむ一方で、教材化には現代語訳や生徒の漢字力の向上など課題が多い。

また、日本漢詩には背景と切り離して生徒自身の鑑賞に堪える作品がある。そういういわば普遍性のようなものが生徒との距離を縮めることを可能にする。

さらに、作品を通じて生徒自身が考えるためにはそれなりに時間が必要である。読解に時間のかかる散文は現在の授業時間数の中でこなすことが難しいのも事実であろう。

こうした理由から日本漢詩に焦点を絞り、教材化の視点から読み返すことになったが、その過程で多くの収穫があり、様々な視点も得られた。それらを整理し精査吟味するにはまだかなりの時間を要する。現代を生きる生徒の主体的な読解を促すような具体的な提案を今後とも少しずつ積み重ねて行くことにしたい。

2) 日本漢詩・漢文の可能性

この3年の間にも教育をとりまく状況は刻々と変化している。グローバル化とITが学校教育にも大きな影響を与えている。グローバル化でいえば、中国はその経済的成長を背景にアメリカ・日本に不可欠なパートナーとなっている。中国製品なしで生活しようとするのは非常に難しいことがアメリカで話題になり、改めて中国との繋がり深さが人々の間で実感された。日本でも中国製品なしで生活することは、難しいであろう。実情はアメリカ以上かもしれない。モノの交流は人間・言語の交流でもある。

現在の中国と日本とでは漢字・漢文の有り様は同一ではない。それは前近代においても同様であった。日本に入ってきたときから、漢字・漢文は異質な他者であった。そして文字・文章と同時に、それが包含する思想も同時に日本に入ってきた。異質な言語である古代中国語を用いて、自己の感情や思想を表現する行為は想像を絶する営みであったろう。そのような営為の中からひらがなもカタカナも生まれた。つまり異質なものを受け入れ、格闘するところからこの国の言語は創造されたのである。

古代には古代の、近世には近世の漢字と漢詩・漢文に対する受容の姿があった。それが大きく変わったのは近代以降である。いわゆる近代化政策の中で漢学は固陋とされ、創造的な存在とは見なされなかった。そして、「漢字・漢語・漢文」をどのように「国語」に位置づけるのかは大きな問題であった。近代・明治におけるグローバル化は、朝鮮・中国との関係が不可避であり、その意味でも中国をはじめとする日本をとりまくアジアの近代はいまだ精算されてはいない。「国語」の成立に植民地の言語政策が影響を及ぼしていたことは事実である。他者との交渉が「国語」を多様な面からとらえることを要求したのである。改めて「国語」は時間的・空間的に長く大きな広がりをもってと

らえられなければならない。

近代以降、漢詩はほとんど顧みられることがなかった。しかし、漱石や竹雨の詩でわかるように「蝸牛」に対する詩人の繊細な感性の表出も「原爆」に対する激しい怒りの表出も漢詩は可能にし、中・高校生に感じさせ、考えさせる力を持っている。

今回の研究は、日本漢詩の教材化を目的とするものであったが、「日本漢詩・漢文」もそのような文脈でとらえなおしたとき、これからの国語教育に新たな視座を与える可能性を持っているといえるだろう。

(朝倉孝之、岡本恵子)

参考文献・資料

- ・『頼山陽・梁川星巖』入谷仙介注（『江戸詩人選集』第8巻、岩波書店、1990年）
- ・『広瀬淡窓・広瀬旭荘』岡村繁注（『江戸詩人選集』第9巻、岩波書店、1991年）
- ・『広瀬旭荘』大野修作（『日本漢詩人選集』第16巻、研文出版、1999年）
- ・『江馬細香詩集『湘夢遺稿』上』入谷仙介監修・門玲子訳注（汲古書院、1992年）
- ・『子規全集』第八巻（講談社、1976年）
- ・『漱石詩注』吉川幸次郎（岩波書店、1967年）
- ・『漱石の詩と俳句』和田利男（めるくまーく社、1974年）
- ・『漱石と漢詩』渡辺昇一（英潮社、1974年）
- ・『近代文学としての明治漢詩』入谷仙介（研文出版、1989年）
- ・飯田利行『漱石詩集』（柏書房、1994年）
- ・『日本漢詩下（新釈漢文大系46）』猪口篤志（明治書院 1972年）
- ・広島平和記念資料館WEB SITEのアドレス
<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/>